

たいらきたかまあと
16. 平等北窯跡

所在地：越前町平等

調査原因：越前窯跡発掘調査事業

調査期間：平成 24 年 11 月 6 日～12 月 21 日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：60 m²

時代：幕末～明治時代



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 遺跡は、越前町平等の集落北側森林の傾斜地に立地します。窯跡は、当事業で実施した分布調査で発見され、現地では連房式登り窯の痕跡が一部確認できました。

連房式登り窯とは、地面に床面を作り天井をかけた窯で、縦一列に複数の焼成室である房が並びます。各室房の奥壁には、下の房の焰を上への房へ導く通焰孔の狭間穴が、横並びに配置されます。連房式登り窯の導入時期は、製品の器表全面に釉薬を施す幕末頃と思われ、窯の様相を記した文久年間（1861～1863）の史料もあります。ただ、窯の詳細は不明な点が多いため、規模と構造などを明らかにするために調査を行いました。

遺構 連房式登り窯を 1 基確認しました。

- ・規模 窯跡が林道下に続くため長さは不明ですが、9 室以上確認しました。
- ・焚口 半円形状の胴木間の先端に、煉瓦敷きの焚口を 1 箇所確認しました。
- ・室房 半円形状の胴木間と連結する室房が徐々に幅を拡大し、4 房目で幅 5 m に達する幅広い室房からなる、蒲鉾を階段状に並べた横室形の登り窯です。各室房の奥行きに統一性は認めませんが、1.6～2.0m に収まります。また、室房を分ける奥壁の段は棧瓦積みです。
- ・狭間 室房前面の段上に壁を立て、最下部に横方向の通焰孔を設ける横狭間構造です。

遺物 製品は主に甕・壺・播鉢と、近世後期頃から増産する浅鉢や深鉢ですが、施釉陶器もみられます。出土遺物の年代から、窯は幕末～明治時代頃に稼働したようです。また、窯道具である円筒状の焼台も多量に出土しました。

まとめ 試掘調査ですが、胴木間の形状や窯体規模、狭間構造を明らかにできました。特に胴木間は関西系の窯跡に多く認める形状で、円筒状の焼台も信楽窯で用いるものです。円筒状の焼台を用いた甕の窯詰め方法も信楽窯と類似しており、窯構造や焼成技法に信楽系の技術の影響を認めます。近世中期頃に信楽窯は京風の碗皿類に生産をシフトし、生産技法も全国的に広まりますが、甕などの大型品の生産技法も各産地へと広まりました。今回の調査で得られた成果は、越前窯の信楽窯からの技術導入と伝統的な窯構造からの転換の一端を示すとともに、信楽系の技術の広域伝播を示す意味でも重要といえます。

(木村孝一郎)

'¼ íT 2§² >& í | ~>'

q ± œ 2.5>k † • + Œ6š&!•>' (ý4Š& í | ~ >' 9xI(Ù 25 l † • c b • b]%&>&0Y | ~>'

Ç'Ä"gb !•Ž>&'T4(½>' b u"g # >& í | ~>' Ü Ø ì b !ç#°' s\ cb#° ' sb •>& í | ~ >'